６５才以上医療費無料３０年、「安心して暮らせる原村」を全国へ

長野県諏訪原村会議員２８年の小池紀元氏、

２０１０年4月6日「いのちの山河　日本の青空Ⅱ」を観る会で語る

すわこ文化村代表理事　毛　利　正　道

◆原村の高齢者･子ども医療費無料制度の概要

✽経過

昭和３５年－３６年　岩手県沢内村で６５才以上・１才未満無料化
同４６年　　原村７０才以上無料化　小池紀元氏村会議員となる
同４８年　　全国で７０才以上無料化
同５６年　　原村６５才以上無料化
同５８年　　全国で７０才以上無料廃止（老人保健法制定により）
２００６年　原村中学３年生まで無料化
２０１０年　原村６５才以上無料制度継続３０年目

✽統計など

６５才以上一人あたり医療費	全国平均８３万円　　原村６５万円 全国最低の長野県のなかで、常に最低クラス
６５才以上就業率	全国平均２１％　　原村５５％ 全国第１位３０％の長野県のなかで、第１位
人口増加率	長野県第１位１１％（全国・県内ともに減少のなかで） ３５年間毎年増加して、５７００人から７７００人に 最近も、毎年４０－５０人増えている
長野県の平均寿命	男性全国第１位　　女性全国第５位

◆小池紀元氏のお話

✽自分も現在、定期入院治療中だが、無料制度で村から年間８０万円医療費をもらっていて、大変助かっている。

✽昭和５８年に国が無料制度を止めたら、全国で一気に止めた、そのなかで原村はなぜ継続できたのか。
昭和５８年の秋、諏訪選出の県議が県議会で、原村の無料制度を止めさせるように迫り、県も「止めさせる」と答弁した。
以来、長野県から「老人保健法違反であり廃止せよ」との行政指導監査が２０００年の田中知事誕生まで十数年間続き、当然もらえる国保調整金などの特別調整金を年間１０００

万円以上削られてきた。
県の指導というものは強烈なもので、議会会報の私の原稿がけしからんと、村長・課長を通じてまで圧力がかかり、遂に内容を変えさせられたこともあった。県の指導の矢面に立っていた課長が中途退職したことがあったが、今思うと、県の圧力に耐えられずに退職の道を選んだのかも知れない。それほどすさまじいものだ。現に、県内の他の村で高齢者医療費を無料化しようとしたときに、県が総力を挙げてこれをつぶしたことがあった。
諏訪地域のある首長からは、原村の村長に対して「自分だけいい子にならないように」と圧力を掛けられたこともあった。

✽このようななか、住民が革新的な村長を３期続けて選んできたし、村議会も１８名のうち共産党議員が３名いて、年４回の議会毎に村長と定期協議を持ち、県からの圧力に耐えかねるとの村長の弱音が出たときにも「公約でもあるし頑張れ」と励まし、「どこまでできるか分からないがやってみるか」との答えが出るなど、励ましてきた。後の村長も、県との矢面に立たされる部課長に配慮し、「村民が喜ぶことに県が文句を言ってきたら、俺が直接対応する」と言った。
　昭和５４年、私が議会の委員長を務めていたときに、岩手県沢内村に村議みんなで視察に行き、すさまじい豪雪、貧しさの中で雑穀を食しているような村で、県・国の圧力の下でも「村民のいのち第一」を掲げ２０年頑張って無料制度をやり抜いていることにみな感動した。その議員の中に、県議会で圧力を掛ける質問をした県議の後援会長もいて、後にその県議に「村民のためにやっているに、あなたはなにをやったのか」とくってかかった、と聞いた。このように、沢内村視察で深い感銘を受けた議員が、保革を問わず、この無料制度を守ってきた。

✽無料制度を続けていて財政が破綻しないか、と良く問われる。
　村で無料健診を実施しているし、医療費が無料だと悪化しないうちに受診して元気になり就労もできるようになる。　このようなことから、高齢者医療無料制度による村の負担は、７２００万円程度に押さえられていて（中学３年までの無料制度では２００万円程度の負担)、村の財政を圧迫するほどにはなっていない。数字にあるように、高齢者一人あたり医療費は全国最低クラス。よく、原村の財政収入がほかの自治体よりも豊かだから継続していられるのでは、との質問もあるが、そのような事実はなく誤解である。
　また、窓口無料制でなく、かかった医療費を後日申請して還付を受ける仕組みであり、みんなが申請すれば村負担医療費が１億円を超えると思われるが、村民は実際にはかかった医療費の７割程度しか還付申請をしていない。なぜ還付申請しないか、「大病して医療費が多くかかるという本当に困ったときにこの制度の助けを借りなければいけないから、僅かなときには申請しない」との声を良く聞く。この制度に誇りを持ち、守っていきたいとの気持ちが表れている。

✽原村の高齢者は、５５％が働いているという全国トップクラスの就業率だが、こんなに年を取ってまで働かなければいけないのか、というような暗い声はなく、生き甲斐を持って明るく働き生きているという実感だ。村の方針に「みんなで支え合う地域福祉」「安心し

て暮らせる地域ケア」というものがある。６５才以上無料制度を３０年継続してきているなかで、村の保健課長が「（この制度は）当村では空気のようなもので、今ではこれを変えたいとは誰も思わない」と述べるまでになっている。

◆「これは日本を変える映画だ」

このように、明日から１週間の定期入院という日における小池氏のお話は、映画「いのちの山河」とも共鳴し、出席者から「これは日本を変える映画だ」との声が出るほど、会場が盛り上がりました。早速、地元３自治体の首長と全議員宛に、６月６日上映会への招待状を届けることになりました。まずは、ここ諏訪地方の他の自治体で、原村に続いて欲しい。むろん、全国どこでも、安心して暮らせる街めざし、医療費無料化に向かう奔流が生まれることを切に期待します。